

# 蓼科に生きる

四季折々豊かな表情を持つ白樺高原は、先人の開拓者により発展した標高1,500mの高原地帯。この美しい自然環境は訪れる方を魅了し、一年を通して多くの方に親しまれています。また、観光資源の一翼を担っている女神湖は歌人伊藤左千夫の「信濃には八十の群山ありといへど女の神山の蓼科われは」の歌に由来されているといわれており、その他の観光資源にも数々のヒストリーがあるとされています。

そこで、今回の館報では「蓼科に生きる」と題し、蓼科の自然環境と共に生き、美しい自然環境を活かし蓼科の魅力を発信しようとそれぞれのお立場で携わっていただいている方に寄稿いただきました。今館報で再度蓼科の観光に目を向けてみてはいかがでしょうか。



## 高原に暮らす

豊田 裕至 (蓼科)

夫婦で神戸から引越して来て、女神湖の近くに暮らすようになってもうすぐ六年になります。白樺高原は以前に観光客として夏と秋に何度か訪れ、信州でもお気に入りの場所になっていました。はじめは別荘をと考えていたのですが、すぐに定住したいと思うようになりました。標高1500メートルの土地に年間を通して住むにあたり、わずかに頼りにした情報といえば、屋根の雪下ろしが必要なほど雪は多くないことと、何年も前から定住している方がおられることくらいでした。最低気温がマイナス10度を下回る日が続く、マイナス20度前後になることも珍しくなく、冬タイヤが必要になる期間が1年の半分近いというのは考えもありませんでした。

それでも、ここで暮らす楽しさや考えと多少の苦労は問題ではありません。夏の快適さや言うまでもなく、四季折々の楽しみは都会では味わえないものです。初夏から夏にかけて次第に濃さを増す緑の世界、次々と咲く野の花の可憐さ、秋の紅葉（黄葉）の美しさには心を洗われます。真っ白なパウダースノーと青空の



鮮やかなコントラストも魅力的です。豆粒のようなカラマツの新芽、風にそよぐシラカバの花、冬の霧氷やダイヤモンドダストなど、毎日暮らしているからこそ出会える感動がいっぱいです。今では冬の寒さにも少しは慣れ、薪割りやストーブの焚き方も上達し、昨夜は何度まで下がったかと、温度計を見るのが楽しみなほどです。とても書ききれないのですが、美しい自然に加え、女神湖マラソンや女神湖音楽祭、湖上の花火など、飽きることはありません。

また、ずっと山にこもっているわけではなく、少し足を延ばせば信州の豊かな